

本年度の研究は、口蓋裂患者の口腔機能に関するものとして、ひとつに顎運動の問題と言語治療をとりあげた。また形態学的問題としては、口蓋裂患者の先天性歯数の異常、その両親にみられる顎顔面形態の特徴について検索し、治療面に関する研究としては、難易判別の基礎調査を開始した。

一般に口蓋裂患者は、前歯部は反対咬合を呈するものが多く、かつその被蓋の程度は深いので、こうした特徴をもつ患者数例を選び、筋電図及び顎運動の検討を行った。その結果、咀嚼筋電図所見では、側頭筋の放電活動は咬筋より先行し、また、咬筋の放電活動は他に比較して、その電位は明らかに低いことが認められた。

顎運動路の所見では、開口路と閉口路とのずれが認められ、かつその軌跡は閉口路で特に不安定であった。

これらの所見から、この種の患者の機能的検査には、左右的な顎運動の偏位よりもむしろ、前後的なそれを検討すべきであるように思われる。

唇顎口蓋裂のうち、口蓋に異常をもつ患者は、その閉鎖手術にもかかわらず、組織欠損の程度や軟口蓋や鼻咽腔閉鎖機能不全によって、構音障害をもつ症例が少くない。今回の調査の結果、言語治療班を主体とする系統だった治療計画に基づく早期手術例の術後の言語管理体制下で受診した患者群では、言語治療の回復は勿論、咀嚼障害の改善にも極めて有効であることがわかった。

口唇をはじめ顎や口蓋に裂奇形を持つこれら先天異常児には、歯の欠如や形態のわい小化あるいは逆に過剰歯の発現があることは知られているが、今回は、乳歯裂期から永久歯裂期に移行する症例76名について詳細な調査を実施した。その結果、欠如歯や過剰歯は、乳歯裂期では30%程度のものが、永久歯裂においては倍化するという結果をえた。また、上顎側切歯、上顎第二小臼歯の欠如は、一般集団にみられる頻度よりもはるかに多い。また側切歯の欠如は中切歯・犬歯間に裂がある場合65%、次いで中切歯・側切歯間に裂をもつタイプ28%を認めた。

口蓋裂の遺伝的問題はなお不明であるが、唇顎口蓋裂患者男女各30名を発端者とする両親のcephalogram分析の結果、父親群および母親群ともに、成人唇顎口蓋裂患者のそれに類似する傾向があることが判明した。特にそれは、頭蓋基底角LNSBaの開大、上顎骨長径および高さの短小、下顎骨各部の短小、下顎角と下顎下縁角の開大に表われている。

口蓋裂術後にみられる咬合異常の矯正治療に関しては、長期間を要し、かつ困難なものが少なくないことはすでに昨年も報告したが、側方歯群交換期の男女13例の片側性唇顎口蓋裂患者について、難症と思われるものと、比較的軽症と思われる両群についての歯列の石膏模型分析とCephalogram分析の差異を比較したところ、模型分析の結果、理論的に差異があると思われる上下顎第一大臼歯の近遠心関係に有意差はなく、前歯の上下的關係にも差は認められなかった。

なお、上下前歯間の距離over jet が約3mmを境として、これ以上のものは難症、これ以下のものは軽症と考えられる。

Cephalometric analysisによるとLANBでは難症群が -0.4° であるのに対し、軽症は、 $+3.0^{\circ}$ で明瞭な差を示した。LSNA、LSNBそれぞれに関しては予想に反して差異は小さいことも判明した。同様な所見はgonial angle、mandibular plane angleにも認められ、将来の難易判別の基準設定に、臨床経験が重要な役割を占めることを示唆した。

口蓋裂患者の顎運動機能について

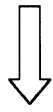
東京医科歯科大学歯学部 三浦不二夫

唇顎口蓋裂患者の顎運動機能の特徴を把握する目的で、先ず今回は比較的症例が多くかつ難症と思われる著しい前歯部反対咬合と過蓋咬合を合併する3症例を選び、咀嚼筋電図と顎運動路の同時記録を行って、その顎運動機能を検討した。咀嚼筋電図所見では、側頭筋の放電開始時期は咬筋の放電開始時期より先行する。また咬筋の放電活動は他の筋群に比較してその活動電位が明かに低いことが認められた。さらに触診でも咬筋と側頭筋前部および後部に著明な差が認められた。

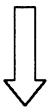
顎運動路の側面からの所見では、いずれの症例においても閉口路と閉口路とのずれが認められかつ、閉口路、閉口路ともに軌跡が不安定であり特にそれが閉口路で顕著に認められた。さらに咬合位 $2\sim 3\text{mm}$ 近辺で、閉口路の前方への大きな偏位による閉口路とのずれが認められた。正面からの所見では、いずれの症例も左右の運動路のずれは僅かであり、かつ開閉路もスムーズで安定していた。

これら閉口筋群の筋電図所見および顎運動路所見より、左右的な顎運動の偏位よりもむしろ、前後的な偏位が存在すると考えられる。

しかし、今回検討した症例は、いずれも反対咬合に過蓋咬合を合併した症例であるため、得られたこのような特徴ある所見は過蓋咬合に起因する要素が多分にある可能性も考えられることから、今後多くの口蓋裂による不正咬合について検討するとともに、他の不正咬合とも比較検討してゆく必要があろう。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



本年度の研究は、口蓋裂患者の口腔機能に関するものとして、ひとつに顎運動の問題と言語治療をとりあげた。また形態学的問題としては、口蓋裂患者の先天性歯数の異常、その両親にみられる顎顔面形態の特徴について検索し、治療面に関する研究としては、難易判別の基礎調査を開始した。